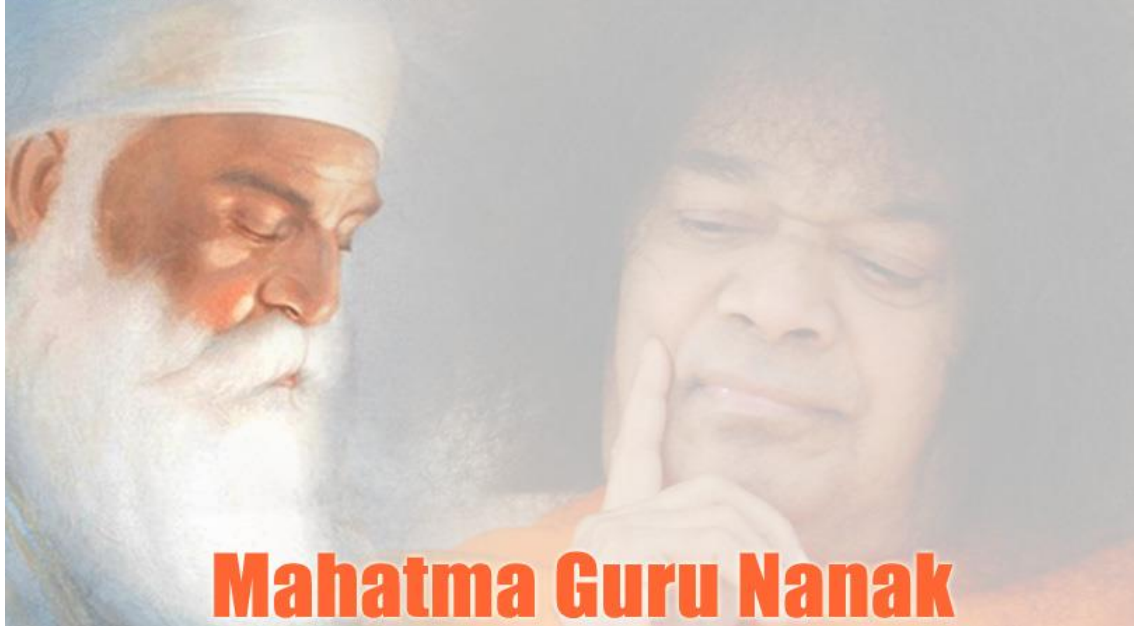


Guru Nanak image courtesy: amritsartemples.in



## 偉大なる魂 — グル ナーナク

今日では、もし子供たちがブラフマー(神)の様相について何か質問すれば、両親は、時間を無駄にするべきではないと言って、その好奇心を抑えてしまいます。子供たちは、そんなことはもっと高齢になってから考えなさい、と言われるのです。今、ブラフマー(神)の様相に関して説教をする多くの人々は、世俗の欲望に従っているために行き詰っています。ここに、小さな物語があります。今日はこのグル・ナーナク・ジャヤンティ(誕生祭)の機会に、バガヴァンがお話しになったグル・ナーナクのある物語をご紹介します。

ナーナクは神の聖なる思想を伝え広めていました。そして、ムスリム(イスラム教徒)たちでさえナーナクの教えに惹きつけられました。ナーナクの教えはすべての宗教に受け入れられているかのように見えました。ナーナクは人が選ぶべき道を明確に示した人でした。やがて、幾人かの宗教指導者たちは、すべてのイスラム教徒がナーナクの宗教に夢中になるのではないかと心配し始めました。

彼らはアクバル帝に苦情を申し立て、ナーナクに難色を示すよう皇帝を感化する作り話をしました。彼らは、アクバルにナーナクを罰してほしいのです。しかし、アクバルはすべての宗教に揺るぎない心と大きな尊敬の念を抱いていました。指導者たちがナーナクに関する苦情を述べても、アクバルは彼らを信じませんでした。

アクバルは、直接ナーナクと話をして状況を査定することに決めました。アクバルはナーナクに使いを遣いましたが、ナーナクは俗世界の支配者である皇帝に会いに行くことはしませんでした。ナーナクは帰依者のためだけに行くのだと言いました。ナーナクは、自分は神の王国を歩き回る自由な人間であり、アクバル帝に会いに行くつもりはない、と言ったのです。

その返事は、宗教指導者たちをますます激怒させました。指導者たちはもっとナーナクを困らせようと計画し、綿密に探りました。しかし、アクバルはナーナクに言葉を送り、翌日モスク〔イスラム寺院〕で神を讃える祈りがあるので、ナーナクもその祈りに出席してほしいと求めました。アクバルはナーナクを乗せて運ぶためのパランキーン（輿）も送りました。

しかし、ナーナクはパランキーン（輿）に乗って神の住居に行くのは非常に傲慢であると考え、モスクまで歩いて行きました。他の人たちが来るよりずっと前に、ナーナクは遠慮がちにモスクの片隅に座っていました。宗教指導者たちは祈りの言葉を唱え始めました。祈りが始まった途端、ナーナクは大きな声で笑い出しました。そこに集まっていた人々は、皆、大変な怒りを感じました。ナーナクが大声で笑ったため、人々は祈りの言葉を聞くことさえできなかったのです。

しばらくして、アクバル帝が祈りを始めると、ナーナクは更にもっと大きな声で笑い出しました。そこに集まった人々は皆、彼がアクバル帝にさえ恥をかかせたことに怒りを感じました。その後、アクバルはナーナクに近づいて、なぜ祈りが唱えられている時に彼が笑ったのかを優しく尋ねました。ナーナクは言いました。

「あの僧侶は祈りを唱えていましたが、彼の思いは自分の子供が熱を出している自宅にありました。僧侶の心は自宅の方に向いていたのです。もし人が心であることを言いながら、何かそれとは別のことをするならば、その人は宗教指導者ではあり得ません。これは何の役にも立たないことです」

アクバルはその僧侶のところへ行き、祈りを唱えていた時、本当に彼の心は息子のことを考えていたのかと尋ねました。その僧侶は、子供が高熱を出して苦しんでいたため、祈りを唱えていた時でさえ息子のことを考えていたと確証しました。

それからアクバルは、なぜ自分が祈りを唱え始めた時も、ナーナクが笑い続けたのかを尋ねました。するとナーナクは言いました。

「なぜ私が笑ったのか、あなたをご存知のはずです。あなたがここに来られる前、パンチャーラ国の王様から数頭の馬が贈られてきました。あなたは非常に馬がお好き

ですね。ここでお祈りされていた時も、あなたの思いは馬のことに向いていました。それが真実ではありませんか？」

ナーナクが笑った理由についてこのように答えた後、アクバル帝はナーナクが彼の宗教を広めるのを助け、全面的にナーナクを支援しました。

私たちが着手する祈りの中で、私たちは祈りを始めた直後から、すぐに蚊を叩き続けています。初期の頃のナーナクのような宗教指導者たちは集中力を持っていたため、マハートマ（偉大な魂）と呼ばれていました。彼らの思いと言葉と行動は、完全に一致していたのです。

サマスタローカー スキノー バヴァントゥー

